

LICENSED PRODUCT

NODAN Gray Scale

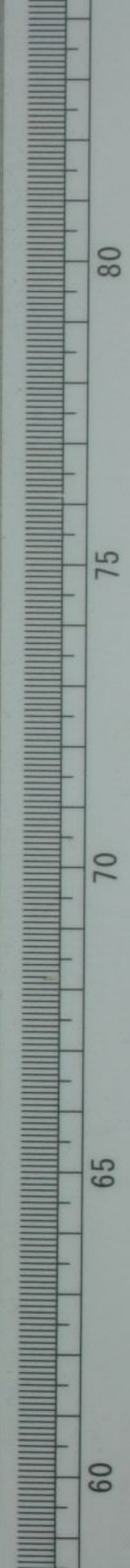
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



親黨序文返破  
乙



5  
1900  
2/11





鳥心彦

乙

親書序文込破

平井藏書

泊涼橋

- 一 親書の序文に子此非を云化の宗匠撰と  
談至綾錦を唱ふ事を込破也
- 一 譬喩雜語異句の高点の評付を親書或鄙談  
の体をやふ事
- 一 付合不換の説 并一晶一蟬付合の大意と述事
- 一 季歌一桑句の評其角作例なる事
- 一 如く家俳諧滅却の論五色墨あやめ



いふは凡序ハ詩乃大序にほあり其  
體其書の體を述てよくその事此次才乃  
辭あるを序といふ序ハ緒也蘭の絲篇の  
ふしとこそあり

爾雅云序ハ緒也字亦作叙言其善叙  
事理次第有<sub>レ</sub>序若<sub>中</sub>絲之緒也

又釈詁云舉<sub>ニ</sub>其綱要<sub>ニ</sub>若<sub>ニ</sub>蘭之抽<sub>ニ</sub>緒<sub>ニ</sub>

羣談採餘曰序者次第其事始於詩  
書之有<sub>レ</sub>序

公羊傳疏曰序ハ舒也叙也舒ハ展<sub>ニ</sub>已<sub>カ</sub>意

以次第叙經傳之義述<sub>ニ</sub>已<sub>カ</sub>作<sub>ニ</sub>注<sub>ニ</sub>之意<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>  
謂<sub>ニ</sub>之<sub>ニ</sub>序<sub>ニ</sub>也

序文のまをを俗にいうをいへば其  
後仰りの如居或は出院床棚のありさ由  
幕下座のありさひ門前まで大概のまの  
まををいへばものて序乃造作館の緒の  
を文<sub>ニ</sub>と混合していへばぬ事し彼序の  
その家のありさよくいへば序乃そのまをを  
序といふ事の希もあつて後よあらはし  
悪根のまをを混<sub>ニ</sub>藉<sub>ニ</sub>なり



又その序の末に道を由り行り之種の冥  
らむようかんをさるる道を直るるを物と  
かろふを親くくむなり

葉公語孔子曰吾黨有直躬者其父攘  
羊而子證之

孔子曰吾黨之直者異於是父為子隱  
子為父隱直在其中矣

我礼色もはかり能え月日は  
ゆめはあつちをたてし  
かひてしめてし

下略

此文段は已にぬめる例の如く論じお場をたてし  
賣物いし日お場し暖簾をたてるは名高き  
灘酒商の流せしむる事しつと外に  
ぬもあつちも童祭りの米酒のお場と  
河内をたて暖簾をたてし灘酒を賣るは  
文に定むる家子我と子と紙對し宗匠  
人を賣人の酒市小僕と比あるは  
考の事も二神の事あるは叶ふ事  
○月子居日居 亦もそのやうな  
詩經史記なると日居月諸とあるは  
諸の辭し

當流乃俳諧よのた軍あり其人  
 いち三十に及と廿二ををこれ傳  
 如く師範に等しく創門弟子を  
 自由とするといふそや 下略

此文段は當時壯年の宗匠の事をいふから  
 宗匠の師を論議を信し蕉門流を師と公に  
 するは汝僕俸<sup>キヤウカウ</sup>にして宗匠の名を祀せりや  
 誰方のあきつゝなる事と熱をもつてあてははれ  
 ざるを<sup>カク</sup>怨むるや若き人のこゝろを妬むる曲言と  
 迷<sup>ヒ</sup>才鄙哉<sup>ヒ</sup>を偏頗<sup>ヒ</sup>のものなりと

凡中真の用師芭蕉翁其角沾佳凡雪  
 為の歌もあぬ作老ありといふも其を  
 眼力不足よめて古書とてめて自出  
 句は虫一哲となる 下略

け文讀みあき俳士一射してんれ事不足は  
 若子の俳士なきはうりて云己老<sup>カシ</sup>老となりて  
 頂眉の霜雪を食らうとも何の美うんぬひく  
 おさ<sup>カシ</sup>後しく老さうばひて毛兀るを西園寺  
 ありせし事もあり兼ありたる俳諧師と  
 上よりあはれき庵での藝能老若いふ今

唐の劉晏リウイン七歳にして正字の官になり八歳にて  
頌を献ツク祖元珍ソウゲンチン八歳にして詩書を誦せ我  
朝の管神七歳の時の詩詠あり小式部コウシキベも  
是とよき書人の娘の言をありその射御の道  
ありと云うして堪能あり何と其角凡書人の  
志と云ふは哲人のありと云ふは後世達令と  
いふものあり所きつてその角凡書人の志赤人と  
泰會して上りとなりる孔子の教を乞ふの禮を  
あり釋迦と直付なりぬ高貴の僧ありと此言  
花利よりんは五言の詩ありと云ふ凡書人の志

志れどもかひむく大の宗に古非湯のありと  
なり志りのみ汝又酒囊飯袋なりとの  
別その集より傳る水園の事々なるの非湯は  
何れも晴星といふ名あり似照星ニシウセイ女晴雪と  
あるありをとりて予々授けたり昔いふの  
職分にあたりし時和歌才立志門に後ひて  
立禁と改まらぬを後宗師となりて迎ふ  
よれとありたり長春なりと名にいふ國の事  
批ヒありと人々法りる命なるを大横  
此水園の太白堂にむらりといふ凡書人の



疲龍其角、まのを見らるるまじりの男なりとて  
活イキらるる角と見らるるものにも者なり

心して呵らるるあはれ無きあはれ  
心かくのあはれ——貪心中垣乃諫ハ  
俳戯と掲つる——

希よ云古書乃白波自己の白に並れよひ  
神仏の書とよして俳諧遊人との書なり  
神子の排士(一)——して縁なきる文法なき  
万の事は何れあり碩学志望の人あり  
巧劣して哲とと紀となる事と哲人

初学の時ハ五白言の席よあはれ、自白と二白  
とよして随分のありて大いなる五白もに代り  
よと端座する事——他の白波の——  
白は川をたよふと排諧は禪カシカウ仰の時ふし  
心道を教へて俳の道をやと熟ニユク路ロなるは  
他の白に似るるに似しなるものこそを  
俳戯をく制せし門子入人あり此等の勢統  
かりて心道をあはれとひとひとあはれ  
あはれし心と則ちあはれし真の呵らぬ心を  
書かすは是を破志乃者なり——

近茅糶子宗匠乃系圖を定ぬ梅行せ  
一先己の後世にいてそ血脈を毒人  
他國に犯し胡海軍者あり思しき  
業なりをのくいつて此奇徳の端に  
許く多久此罪を速く免さくといふと  
小人のかりり多しと止ぬ  
此文終り予の編集乃あるのさき破りたり  
想しては序乃一辨そ尾個なる中  
よりを此段の文のあやとり方蓋同器にて  
よきものなりをたりにしきしおきいとも文を

書とおもふは渉猿やまの條の悲し業と云く  
○己の後世にいて 吾も汝も佛徳成分  
も世とてりよありや志ししと吾もか別  
産ありあて在とみ金眞禁して吟ふに  
りて 或人云を方々後世に志するを染  
劣疲にもなるに當り偏に地の私氣ををの  
び痛し病と云俗説より浅草寺乃米美此  
繪馬に僧正坊乃太の腕りみぐりて苦  
勞あり人も世ありとそ長し短しとそは  
乃か内心なる人なり

○其血縁を述ぐ 後録の序に云く  
宗匠の系譜久しき古書を後 貞徳  
備後記貞徳永代紀など 誠始と云く  
乃去を以て 中興の事 扱ん尺草及凡堂  
九梅等の古老乃備き 縁を物し 是を紀  
らうと云ふ 吾等々々を 古書 是に 精簡  
あつて 予々其 形を 得るもの

○他國を紀 他國の人と云 能く其  
紀と云ふもの 形して いかん ぬ なる 國を  
紀と云ふもの 形して ぬ 他國の 能く云

他國田舎の能く 皆 魯 能く 素 都 乃  
能く 皆 才 智 なる 田舎の 若を 記 ぬ  
文法 いら 荒 涼 乃 曲 者 田舎 によく 光  
を さ する くら び あり 江 都 子 序 文  
乃 去 々 々 ぬ 老 考 あり

くら び あり 子 の 考 ぬ なる 考  
ぬ なる 考 あり なる 考 あり

○胡 備 乃 書 あり 胡 能 乃 二 字 二 字 光  
子 唐 書 胡 統 乱 道 といふ あり なる 事  
なり といふ 事

ひ

十

○者へりて 連中の鳥書乃、いふまゝに、  
書に、  
やうやあやう、さきほづま、ぬくの尋せん、  
う、先には鳥書の下居を記し、求むるが、  
鳥の印辨を、  
五里十里の境を出ぬ、  
數十程、  
道と、  
そ、  
おの、

その一集乃中に、  
鳥書、  
とす、

○許、  
は、  
暁、  
天照御神、  
を、

〇一

〇一

天々下のそののちもして後に引引申すこと  
飛を志する事慙愧なり一むぢく  
其し古語を引引申すことおびある事と  
その形列もあつて其事世も今ほあること  
○小人のかりる事と止ぬ 此形列一  
かじをくつて文なりとるを尊大にして  
かりぬかりぬ事と止ぬ一かりぬを小  
つてあつかりる事と止ぬ一かりぬを小  
その飛もあつて人云は何乃徳所ある  
君子の徳も稟性愚昧にして砥玉を并せ

金鑰を分つた限りて予退り竊に  
道徳をありしむ

君子成人之美不成人之惡洪反是なり  
唯道を志すは君子事業代不易にして  
君子の三神の冥冥とあつて  
乃輔齊治例六十五の書と  
道を直し行ふ三神の冥冥とあつて  
事勿論なり志するに彼一序の筆端  
象子乃非をあり一若し宗匠をあり  
江都乃俳士を朝一他國田舎の俳人を

嗟一此の集を以て一其一集の本意を  
 一を以て一向の悪口雜言めし本未を  
 志中ひくる文なりあまを直道といふ人  
 倭新非曲乃心術いふは三神のこゝろ  
 川一流あんなことを人又判り一  
 〇彼集を親くくむすとい何申す早け  
 〇を去る序文よりその歌名の趣意を  
 らいよその書るにわづら其汝法なり一  
 俾つ不凡雅を想つむとて親の縁ハ  
 せく一あまをくくむすといふは

梨の祓のそふらも又えとあつまのま  
 〇あまをくくむすといふは  
 〇或人答云巻既  
 乃發白いふは子いふは  
 連中いふは子いふは我の親父との親  
 さてハ

知親 鶯親父 非真親父  
 嘲音 邦黄鶯 非真黄鶯  
 見來 尔是 鶯鶯類 幸被 人呼 黄鳥 名

○ 異句 高点乃評

貞亨元祿の頃より江都のふむちやうと  
蕉門流よりついで俳風直なりし享保十有餘  
のふむちやうと一變し能れまゝなりしあ  
たりちやうと全く作者の科よありに判者乃  
異句を好めるよりちやうと罪ハ渠一人より  
まゝなりしその時とて強き論者かちやうと  
流布志する高点の句に

生肝を冷ふとちやうと其が

其干を其わうと五文字よりつむ

兎兼首飾の本不と本おのりいと五文字に  
つむむる句に和階堂立志のあつとちやうと  
とてとちやうと又古来は句に梅干と梅法師と  
いびつを老僧の梅干のふとと歌のよりのちやうと  
其干を尼法師なとて無とせとちやうと  
け生行の一句とちやうとに法師のふとちやうと

靈照女とほむふ味噌瀝

是がちやうと魚の音の文字に  
キヨチヨチヨなとちやうと下はフの字を  
吟する事あり或女御女房なと云ハ餘音なり

又下に置きの付ざるあり女中狂女班女照女の  
勢ひし

○弁比丘尼の事を比丘人といひてかの巨悪  
つりてんを十白り八白りあると成しとれ也  
比丘尼と白ゆりしてよれ也也と成し比丘人  
と作者の志をもた白し比丘尼といふ常の原  
の事よ成比丘人といふも二弁比丘なるに決定  
志するもがし一平初等の初連才の白よ

柳と云る比丘人乃縁

とて雪舟の巻一のうりせり比丘人とい

り事一は白の比丘尼の縁の柳なりと  
とて二弁比丘といふ事あるとかやせりといふ  
は事とかの比丘人の間人かたりとれとれ  
凡そありあり我々の云の比丘人の信縁し  
連縁といひ縁縁の信縁を有に由申事  
なりとての事し

俗語と云の捨る事をうらやむ載とまける  
何故よをあげて是等の教を信縁と云し  
かくはんといふらんぞらんぞらんぞの教  
ハ強なり信縁とかい言を希ぬる事等の



う言よこえはるかり

○とあるの事在大東に在る所ハか言信済  
ゆふん子んやゆふ事まふあり信徳の自服  
ゆふ湯を火俵をせむ其間人あれたるも  
せぬもふく火の故を問ふ 或云湯に飲食乃  
部よ入を火俵あは湯を火俵とせよ木  
汁食も食て火を焚知皆火俵にせよ木  
餘火俵との湯とるを火俵よも食き程  
なりとて一通りきこえるなり 或人の云是  
大づこのる言し湯に火氣あつて湯気のふ

くらの多し火氣あくなれ元の水にとりて  
湯の必なり茶そのおのあてもそを煮湯に  
そのへさゆ飯の湯のこい湯へくは風呂の湯の  
勢ひの飲ぬ湯を飲物とすはがらをこす  
下 痔乃 派い 留士 のこり 魚ん  
是一軸の香逸なりととと抜てる馬子るふい  
いめそや凹凸窠先生留山の侍

仙客來遊雲外巔 神龍栖老洞中淵  
雪如純素煙如柄 白扇倒懸東海天  
此句妙なるよりむ妙なると云ふと三句を雙乃







え来りて申なむとと申の人共おしくいふ  
くく或人の云くくに病状支障ありきを  
るにむすむらあはる息となるとあきこ

蕭ととてせておろし肩痺

とりを付しにゆるき息をたふしに二三  
息のありきありしときぬまをいふ

〇或同 譬喩乃ををりしとて人知れ  
然るは是六候のせしめて與し

定家川の流況真子二つあり譬真昂真

山村孝吟所の云は真とのよ

こゝ感じよむとてつとあつと

とゆのまじりいよみは

又節真の時物ありしとて真ありき

却りてつひるをりし又毛詩子真とた

よあつとをりしとてあつとあつと故に真を

たとへずとらへし風賦比真雅頌乃ら

なるとや 言云はるをりしとてあつと

と宗類所乃説

とを川乃雪れ柳や滝の系

あは連子の真なるなり

うらうねの秋風糸の赤くは 貞徳  
をみるあゝたふもあいの地傳汁 季吟  
拾穂足生與乃まのよはあををむま  
追ふもたふまのり(ま)

埋木見

○ 付合 不構出説

自他の付合を其前に其前白のまのり人の  
ころも付合のまのりて前白をむま  
ま申入ぬまのりてまのり其故のまのり  
付合のまのりてまのりも付合のまのり  
まのり不二の難のまのりなるまのり

流のりてまのり人へ付合のまのり  
あゝ席のまのりてまのり人へ付合のまのり  
事し是を懐叙と号く其席のまのり  
いせりく分のまのりてまのり人へ付合のまのり  
換失なりとてあゝ又備士澤のまのり  
席なりとて折しつゝかのまのり  
白紙のまのり入出座の備友つゝ  
西入のまのりてまのり人へ付合のまのり  
名付のまのりてまのり人へ付合のまのり  
借敷減のまのりてまのり人へ付合のまのり







○季如——茶臼之事

百乃と申下子其くこの生質をねらふ此等  
悪を紀よあはに法令をそむきて播擲キヤウケンなり  
澄吹スイの徒と得のつ——

○一とせ西又延産テイクナト牒緘テウケンの一物摺テウにぬかふ其の

引付や日本檜角忍び寸紙

是も茶臼といふものなるは延産ハ帳を産——

日本檜の角に居住あり、悉皆あまの關戸に懸り

宿れ乃や、斯る茶臼し其く人けらの季の引付やと

つ手筒乃五文字を垂れしとて又とて入威且

三つ物の引付といふも其事と知れざるなり——

桃あか先七ツ等の三つ物の流ハ付も其引し又其人

多人の白の流ハ付も其引し何と表は流る人きや

○一とせ引付や及乃白に くららあまのせうの

三子此意や昔付年八卦

は白乃事といふゆゑそを志しその事は何にせよ

先一白流志せと三子の意といふことらとせなる

てふこととあはれ桃吹意の事、一念三子の意

もをもす毎に敷山の三子此意なること此れ人

に同く申すやの心流き事いふなり——

唐のちれいをかこころし隠きつりあり先づ辨山宮に  
三子人の居あり番那大名小治かよの座安州北  
窓栢子に廿中まきく物見せむハ三子人北居北  
逆居する風情なほことおしを二子の意といふ  
なりその意のそむを書付年八卦と書ありく  
さゆし書大といふさうしてさむかこころして書  
に成り三子とさうりいひて居れりみかたり是  
か白なりとやと泣歌せしめて今と無と傳せり  
○先年其角北兼且白帳に

文禄十年の書付と書

弟店の表女——さよ日本橋 作若丸  
此——病ひして汝難賣書 其角  
同云は服書にかりや 昔云北國の志は江戸  
はくは書書にかりし——病ひして汝難賣の  
正月さうりも書ありか——又帳を立て五程書せ  
賣るとはれ七月の書にかりしとてれ  
正月は芝居の書付と年八卦を記しハ子賣しと  
少書も江戸の書書とてれは志うれしと書にかり  
平白にいつくとも茶白子ハ用ひぬ道具あり考へ  
志る——晋子の人の茶白の事ハあり



○表紙の破る時、此希有あり。是  
五色墨燈——ある刻、此由をいふをす。集し  
つゝ、本曾信別より、筆の時、平家の強動  
志するまゝ、寄合お流し、志せし、即成して、  
表の折り、いふ、の事、あんと書林の門、市と  
なり、我、さ、れ、あ、る、を、ひ、求、め、て、又、是、を、何、の、も、  
な、れ、平、素、の、御、得、し、亦、後、縁、燈、の、時、も、す、り、  
点、若、此、非、を、あ、る、り、佛、書、な、り、と、大、い、子、踏、き  
回、文、を、お、好、ま、ら、る、茶、舎、あ、ら、い、書、賣、と、い、は、  
し、あ、る、は、く、坊、癡、を、な、せ、り、集、成、て、い、ふ、

表紙の秘も、かつ、る、を、求、め、あ、り、て、又、是、を、  
是、も、さ、せ、る、事、あ、り、恐、れ、た、と、志、す、り、是、等、の、  
破、り、か、ら、い、破、滅、此、前、表、な、り、  
○五色墨の由をいふを七さんと編る集  
あ、ら、い、に、あ、る、尋、常、此、破、紙、し、或、人、云  
い、ふ、ゆ、も、常、の、平、信、の、書、な、り、な、れ、と、も、五、色、墨  
流、通、し、て、よ、り、此、由、を、い、ふ、滅、却、し、て、夏、書  
乃、書、を、入、る、り、時、節、な、り、と、い、ふ、と、早、竟  
此、由、の、雙、言、と、い、ふ、き、い、五、色、墨、と、志、す、り、  
此、等、を、こ、を、毀、皆、も、い、ふ、を、何、の、か、い、ふ、

せぬあやを身をあぶるに何 答云五色を  
大敵なるとしてその怖あはれに色を穢れ  
白雲うらむに孔方兄とのおれなるとして已  
う身の過りしあやめきり小敵と見て悔  
なり 又同大敵を拉ぐと高名なると小敵  
に猪うりとて何の事柄にたん 答それの勇  
者の事し渠中この愚者の及ぶにわは  
かの五老のりも 抜ふのりう蓋世の乱れ  
を太刀折れりぬるうにこころ徹せり後孫  
荷担の巨者かくも 同友門人と解悟して

化よまはるれを何をあてしと足掻めとるし  
已往をくして江戸舟の巨者の長るれと 特陸  
乃位にもなるるを心をなして大言を吐 倨傲に  
して人を激怒し世を欺んとする丘埜村泰ふ子  
かよりんとするものあり 五色の旗てふに色は  
妹をたぬもたに年葉にあらるの涙のそく  
○嘗乃序に書し 八才といふは皆先師ありて  
袖を取まの朋人ありては承あつて門才分ふる程  
後孫の系譜に究竟の宗匠を門下に並べて去けり  
其身の規模をくもや後世にまゐりてを承ある故を

人々之にあらんが丈夫の宗匠教人へ付く  
貞徳芭蕉にひびく徳ある人へ必定向け  
そ身よもんでの欣悦なるれを僻書と刺し  
我より我の空徳をあらすもの世の人云原は増す  
き其間よ入何を学ふ事とて是令私を  
とふくあらあむ世のうの波法とる不顯然り  
○小敵と侮り却て已害となる例を下りま  
ちるあらう條く一時流行を皆人忘れぬ  
事と集あつて一書とる流行とる令日涼  
らよあはは二言よりきわは是偏に歎き  
悪言より已う舊悪とさえはるものなり

悪言より已う舊悪とさえはるものなり  
守武世の中一而首の

世の中此のふらとあつてもあつてもあつても  
ことこの出くる事世の中あつてもあつても  
世の中い身の金をあつてもあつてもあつても

○歎きの一集と嘆きとの解

歎きの強し其後あり一集と稱し百葉の歌を  
あつてもあつても他の流を有くあつてもあつても  
世の中い身の金をあつてもあつてもあつても  
あつてもあつてもあつてもあつてもあつても

○其一集の俳諧をよる一付合おしるるに  
 まるくゆる春白と<sup>子</sup>燕<sup>子</sup>母<sup>子</sup>として秀作多し  
 序文子比ま<sup>子</sup>ま<sup>子</sup>とあること<sup>子</sup>糞<sup>子</sup>掃<sup>子</sup>推<sup>子</sup>預<sup>子</sup>に<sup>子</sup>在<sup>子</sup>價<sup>子</sup>室<sup>子</sup>  
 あること<sup>子</sup>——<sup>子</sup>秋<sup>子</sup>中<sup>子</sup>ま<sup>子</sup>ま<sup>子</sup>とあること<sup>子</sup>——あること  
 漁余の<sup>子</sup>中<sup>子</sup>ん<sup>子</sup>く<sup>子</sup>る<sup>子</sup>四月<sup>子</sup>の<sup>子</sup>如<sup>子</sup>  
 との如や廿日<sup>子</sup>としてま<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>の<sup>子</sup>夜<sup>子</sup>  
 文<sup>子</sup>り<sup>子</sup>如<sup>子</sup>燧<sup>子</sup>の<sup>子</sup>海<sup>子</sup>白<sup>子</sup>細<sup>子</sup>代<sup>子</sup>也<sup>子</sup>  
 唯星<sup>子</sup>の<sup>子</sup>松<sup>子</sup>より<sup>子</sup>似<sup>子</sup>し<sup>子</sup>ほ<sup>子</sup>く<sup>子</sup>きた<sup>子</sup>  
 草<sup>子</sup>市<sup>子</sup>や<sup>子</sup>夕<sup>子</sup>、<sup>子</sup>ま<sup>子</sup>て<sup>子</sup>雪<sup>子</sup>風<sup>子</sup>乃<sup>子</sup>音<sup>子</sup>  
 雪<sup>子</sup>の<sup>子</sup>日の<sup>子</sup>ゆる<sup>子</sup>海<sup>子</sup>——<sup>子</sup>ま<sup>子</sup>の<sup>子</sup>月<sup>子</sup>  
 乾什  
 百洲  
 常仙  
 尾谷  
 乾什  
 羊素

或問 親く<sup>子</sup>ひ<sup>子</sup>す<sup>子</sup>い<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>海<sup>子</sup>の<sup>子</sup>敵<sup>子</sup>る<sup>子</sup>敵<sup>子</sup>乃<sup>子</sup>美<sup>子</sup>を<sup>子</sup>  
 嘆<sup>子</sup>と<sup>子</sup>る<sup>子</sup>い<sup>子</sup>何<sup>子</sup> 答云一集<sup>子</sup>の<sup>子</sup>に<sup>子</sup>敵<sup>子</sup>い<sup>子</sup>わ<sup>子</sup>る<sup>子</sup>に<sup>子</sup>等<sup>子</sup>  
 序文を<sup>子</sup>と<sup>子</sup>て<sup>子</sup>敵<sup>子</sup>と<sup>子</sup>は<sup>子</sup>是<sup>子</sup>吾<sup>子</sup>み<sup>子</sup>る<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>は<sup>子</sup>人<sup>子</sup>の<sup>子</sup>敵<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>る<sup>子</sup>  
 東都の宗道<sup>子</sup>の<sup>子</sup>各<sup>子</sup>年<sup>子</sup>來<sup>子</sup>の<sup>子</sup>舊<sup>子</sup>友<sup>子</sup>も<sup>子</sup>今<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>と<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>る<sup>子</sup>  
 時<sup>子</sup>い<sup>子</sup>ま<sup>子</sup>よ<sup>子</sup>その<sup>子</sup>睦<sup>子</sup>む<sup>子</sup>り<sup>子</sup>何<sup>子</sup>と<sup>子</sup>人<sup>子</sup>の<sup>子</sup>美<sup>子</sup>を<sup>子</sup>掩<sup>子</sup>む<sup>子</sup>  
 又<sup>子</sup>同<sup>子</sup>其<sup>子</sup>睦<sup>子</sup>む<sup>子</sup>み<sup>子</sup>お<sup>子</sup>も<sup>子</sup>り<sup>子</sup>な<sup>子</sup>と<sup>子</sup>口<sup>子</sup>を<sup>子</sup>開<sup>子</sup>ざ<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>や<sup>子</sup>  
 答 心<sup>子</sup>亮<sup>子</sup>此<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>う<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>る<sup>子</sup>心<sup>子</sup>亮<sup>子</sup>も<sup>子</sup>も<sup>子</sup>きた<sup>子</sup>  
 一<sup>子</sup>等<sup>子</sup>の<sup>子</sup>ま<sup>子</sup>げ<sup>子</sup>も<sup>子</sup>あ<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>る<sup>子</sup>ま<sup>子</sup>げ<sup>子</sup>  
 此<sup>子</sup>歌<sup>子</sup>を<sup>子</sup>と<sup>子</sup>て<sup>子</sup>一<sup>子</sup>集<sup>子</sup>の<sup>子</sup>題<sup>子</sup>も<sup>子</sup>と<sup>子</sup>な<sup>子</sup>ら<sup>子</sup>ぬ

あやうな編の端に執るべきの  
序文は各を記しぬるに  
書はせぬこと心算に候と  
ぬるに遊子は一書となし  
かの産姑古歌をとりて  
甲し乃頭號とあるものなり  
崔下菴述

享保廿一丙辰臯月日

武江本町通三丁目

書賈 西村源六郎梓

橋本町一丁目

版工 大久保一富



文刻堂書目録

江戸通本町三丁目西村源六

全一冊

民家分量記

序論あり 全五冊  
二編と三編の文章あり  
四編あり

野總名話

全四冊  
序論あり

民家童叟談

全五冊  
序論あり

田舎荘子の篇

伏見橋山作 全六冊  
序論あり

河伯井蛙文談

同作 全三冊  
序論あり

天狗藝術論

同作 全四冊  
序論あり

六道士會録

同作 全五冊  
序論あり

英雄軍談

同作 全五冊  
序論あり

近代世事談

同作 全五冊  
序論あり

文刻堂書目録

今川腰越状

建治元年 全一冊

新家流清心

建治元年 全一冊

初学消息集

建治元年 全一冊

暇名文章

建治元年 全一冊

万葉書札

建治元年 全一冊

風月性集

建治元年 全一冊

庭訓性集

建治元年 全一冊

變遷説

建治元年 全一冊

婚去来辞

建治元年 全一冊



自隨落 先生 風俗文集

古今新二册 北事集

蝶此蝶

全三册 北事集 松島紀行名所

不思庵書

全二册 自隨落先生作 北事集

古今智慧枕

酒内先生輯 全三册 自隨落先生作 北事集

武家軍談

全三册 ひろくろを入

同軍鑑

全四册 ひろくろを入

武家功者物語

全三册 ひろくろを入

画圖百花鳥

将野探出華石中子字 全五册 五か百五のまの 全三册

繪本蘇州

全三册 蘇州の道とわい 全三册

新後明種

全三册 蘇州の道とわい 全三册

泉山景境詩歌集

全三册 泉山景境詩歌集 泉山景境詩歌集

續景境詩歌集

全一册 泉山景境詩歌集

和歌戀衣

全二册 泉山景境詩歌集

正運紀略

全一册 泉山景境詩歌集

老子本義

全二册 泉山景境詩歌集

老子答問書

全一册 泉山景境詩歌集

蘆隱稿

全一册 泉山景境詩歌集

明詩選

全一册 泉山景境詩歌集

歷代帝王書

全一册 泉山景境詩歌集

文藝小言

全一册 泉山景境詩歌集

銀燭帖

廣次先生門人 蘭珠行書

中書楷法

華生書著 全一册 筆法の要法と記す

芙蓉卷八勝帖

折本一册 鳥石先生書 行草本本

使者帖

鳥石先生書 行草本本

登樓賦

同筆 八分字本本

草書千字文

同筆 全二册 石抄

七物帖

同筆 行書 全一册

禮部韻

鳥石先生技開 高宗御書 全六册

にほころ

全二册 枝知本 江戸平大夫一冊とつむ

前句置附本

江戸平大夫 全一册

俳諧のすりみ

大燭 全一册 前句置附本

をきりか編目

増補芭蕉青四草後夕入全二册 全一册

俳諧句鑑

全二册 月次集 全一册

同寄進能

全二册 月次集 全一册

同寄進

全二册 月次集 全一册

同蘭の梅

全二册 月次集 全一册

同文安久辰

全一册 月次集 全一册

同有浪日記

全一册 月次集 全一册

同犬椿集

全二册 遠之集 全二册

同何名姿

全一册 散花集 全一册

釋親考

伊藤東涯著 全二冊  
釈親の辨明と伊藤東涯の  
著述の流とを考へる

七經子學子考文

官制 全三十二冊  
五經傳習章句 五經子の  
本義と明板の流とを考へ  
官制祖傳作 全二冊  
大塚代との異同を考へ  
くはくは

白石先生餘稿

全三冊 新井英後と白石  
の文と集め書

停雲集

全二冊  
同部

朝明令

龍山先生校訂  
全二冊

伊呂波童蒙抄

全三冊 盛興作  
いろはの極意をこま  
りて考へたる

冠註篋笈大全

同部 全五冊  
二冊目大寺の考へ  
つまひりたる

和制局方

醫學的

醫要談

全三冊 未刻  
龍山先生撰

阿彌陀如来出現記

全二冊  
盛興述のり

宗分禪師語錄

全三冊

捷徑辨義

歩門善山作 全二冊  
真言密教の宗義を  
考へて記す

大般若經轉義

同部一冊

粥飯日用鉢式

全一冊 福壽述  
鉢式の法と考へ記す

遺身性来傳

全一冊 諱福述  
遺身の奇特と記す

聖道衣料編

編典作 全二冊  
衣料の考へくはくは

鳳臺小稿

半賀文成著

古今茶道論辨

辰谷重忠作  
全一冊

同 秘傳の書

五國集 全一冊

同 反古拾遺

百華樓北庭 全二冊  
四知の書と平仙集を考へ  
ひろく考へたる

同 蘇蘇集

吳上遠亭 全一冊  
俳諧の考へたり

同 去、前集

百華樓南亭 全二冊  
又書、蘇蘇人の流と記す  
吳上遠亭の流と記す

同 彩勺兄弟

香白と香 全一冊  
吳上遠亭と記す

同 井蛙問答

半溪著 全一冊  
名考、向答、向人の流と  
記す

同 其砥

貞佐七回忌 石位  
全三冊

同 風乃末

其角虎雪速忌  
家利集

同 桃梅

其角虎雪速忌の歌山  
家利集

同 硯沢

無名作 全二冊 硯沢  
仙傳の地行も考へる

同 吾妻海道

奥州松嶋松の八景十  
カチの記を考へる

同 女、の書

毛越集 全三冊  
俳諧文集

同 燗れ茂

全二冊 平仙合の流と記す  
青変曼長集

同 十、れ殊

平仙集 全三冊  
流と記す

同 古、たれ

全一冊 芭蕉翁五十年忌  
流と記す

同 老山集

全一冊 相人考り

同 後河百員

全一冊 月夜考り

同 江戸七歌仙

全一冊 福吟集  
江戸俳諧宗匠七人

同 芭蕉集

全一冊  
言文連中本と考へる

同 芭蕉拾遺

全一冊  
為音輯

世 萬 江戸御町鑑

全三冊町内奉行年申月支の通合日小評定ありて方内方細事あり年月通町の名主人記町火消の方は恒合他人身内知事外町に去細情等ありて之

世 萬 江戸方角組各編附

一冊 附筆

新刻草書千字文

一冊 附筆

老子本義徵

全二冊 蘆隱先生輯

春臺碑帖

全二冊 南郭先生作 烏石先生筆

上父書

全二冊 附筆

唐詩聯選

全二冊 附筆

産語

全二冊 春臺先生作

甲陽軍鑑傳解

全三十八冊 大合のいふははるまじく記述を引物に附して

神代卷參疏

官刻全八冊 藤兼良述

俳諧續五色墨

全一冊

春臺先生文集

全十二冊

俳諧 活十餘歌仙

全三冊 活十餘歌仙後稿 一冊

民家生要記

全三冊 活十餘歌仙後稿 一冊

源氏焚物掟

全三冊 第八度改訂ありて源氏之新也所り四名名香目別録下をててててててて

俳諧綾錦

著者法涼作 生三冊 綾錦の流の源流の記

綾錦鳥山彦

全二冊

漢語令韻

全六冊 近江板行

能譜卯花衣

一冊 更重輯

能譜温故集

全二冊 連名輯 九百年未久人勢等并當時句加正ノ様也

能譜問答抄

全一冊 龍門先生著 戊辰朝鮮人筆談

鴻臚頌蓋集

全二冊 東儀翁一代のふりて

俳諧 活十餘歌仙

全一冊

易道發亂辨

全一冊 馬光作

行書唐詩選

全五冊 春悵子選抄 五初の内

角田川鏡池傳

全五冊

鎮西源為朝實錄

全五冊 近刻

俳諧咋吸比吟

全一冊

おど巻綱目

全三冊 出來 宝曆新刻

文利書院校目録

四

